

応用科学哲学の問題としてのリスク

伊勢田哲治 (名古屋大学情報科学研究科)

提題要旨

日本の哲学界においてリスク分析 (リスク評価) が話題になる場合、これまで、応用倫理学、社会哲学、STS などの文脈で話題になることが多かった。また、話題にする際の論調も、リスク分析の科学性を疑問視し、リスク分析のプロセスへの社会の積極的な介入を要請するものがほとんどであった。そうした論調が果たした役割を一概に否定するわけではないが、リスク分析についての哲学的考察としてはあまりに一面的でありすぎてきたのではないだろうか。特に、「リスク論」という言葉で、リスク分析からリスク管理にいたるさまざまな段階やそれぞれの段階におけるさまざまな手法をくくりに扱う論法は、リスク分析に関わる手法の多様性を考えるならば、リスク科学者に対して失礼で乱暴な議論だという印象をうける。

本提題においては、以上のような論調とのバランスをとるべく、応用科学哲学の問題としてリスク分析を捉えなおすことを試みる。リスク論をめぐる言説においては、一世代前の科学哲学のアプローチ (実証主義やクーンらの「新科学哲学」) が科学哲学プロパーでない論者によって利用される場面も少なくない。そうした応用分野に科学哲学の現在の知見を伝え、対話することは科学哲学の一つの使命でもあるだろう。もちろん科学哲学の現在の知見が絶対というわけではないが、少なくとも一世代前よりはかなしい洗練された議論が可能になっているはずである。

本提題で特に問題としたいのは、「リスク科学の非科学性」の象徴として言及されてきた「不確実性」についてである。科学的知識にまつわる不確実な部分をどう理解するのか、という問題は科学哲学の主要問題の一つであり、科学哲学からリスク論について考える上でもここに注目するのは自然だと思われる。科学的知識は不可避的に不確実性を伴うから社会的要因によって補わなければ答えは出ないはずだ、という考え方は70年代に科学知識社会学の出発点となった前提ではあるが、現在科学哲学でこれをそのまま支持する研究者は少ない。

欧米では K.S.シュレーダー = フレチットや D. メイヤーがリスク分析に関して応用科学哲学の営みを行っており、リスク分析における不確実性についても論じている。彼らに共通するのは、科学において事実と価値が完全に分離できるという分離可能性テーゼが成り立たないとしても、だからといって科学が合理的・客観的であるということまで否定する必要はない、という認識である。不確実性についても、少なくともある種の不確実性は科学内の問題として捉えるべきだという認識では彼らの主張は一致している。

提題者は彼らの議論の方向性は支持するが、その主張に全面的に賛同するわけではない。たとえばメイヤーの立場では、古典統計学で扱える不確実性が客観的な不確実性のパラダイムとなっているが、科学における「不確実性」について統一的に扱うためにはむしろベイズ主義的な確率観を持ち込む必要があるだろう。

こうした応用科学哲学的分析は、応用倫理・社会哲学・STS からの分析に対する含意も持ってい

る。不確実性の中にも、科学の問題としてその専門の内部の内部で処理されるべき性格の不確実性と、非専門家の視点からの評価が重要になってくるタイプの不確実性が区別できる（これは上記の科学哲学的議論だけから出てくるわけではないが、それに部分的に依拠する主張である）。さらに、例えば用量・ガス応曲線における外挿などの場合には、単一の不確実性を収束させるために両方の要素が使われる、といった微妙な取り扱いを必要とするだろう。こうした微妙な区別をないがしろにしないことが、結局は専門家と非専門家との間の有益な交流のために寄与するのではないだろうか。